シリーズ「発達に違いのある子どもたち」

市では、「障がいのある人、ない人にかかわらず　だれもがいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策に取り組んでいます。

今回も、市内で子どもの発達支援に取り組んでいるＮＰＯ法人「まいすてっぷ」から、発達に違いのある子どもたちについて皆さんに正しく理解いただくために、文章を寄稿していただきました。

問合せ先　福祉課福祉政策係☎㉒1111（内線2814）

―気持ちを表情に表すことの難しさ―

子どもに何かが起こった時、怒っているのか、悲しいのか、うれしいのか、不安なのかは表情を見ればわかる…これはすべての子どもたちに共通することでしょうか？定型発達（いわゆる正常発達）の子どもならば、表情で気持ちの判断が大体できますが、発達障がい、中でも**自閉症スペクトラム障がいの子どもの中には、自分の気持ちを表情に出したり、相手の表情から気持ちを読み取ったりすることが苦手な子が多く、時には真逆の表情をしていることすらあります。**

自閉症スペクトラム障害とは

自閉症スペクトラム障害は、自閉症、高機能自閉症、アスペルガー症候群、広汎性発達障害などの自閉症の特徴を持つ脳の発達に関連する障がいの総称です（以下ＡＳＤ）。社会性、コミュニケーション、イマジネーション（想像力）の障がいをもつことを特徴としており、人口の数パーセントを占めると推測されています。ＡＳＤをもつ子どもたちが苦手とする表情を介したコミュニケーションは、社会性や対人関係において重要な部分を占めており、さまざまな研究結果も報告されています。コミュニケーションを円滑にするための重要な行動である「表情模倣」に関する京都大学の研究は、怒り表情と幸福表情に対し、目に見える模倣があるかどうかを評価したものです。ＡＳＤの成人ではどちらの表情についても表情模倣の頻度が少なく、頻度が低い人ほど社会性の障がいが強いということがわかってきました。

表情＝感情？

自分の気持ちを表情に表す、それは当たり前のことのようですが、発達障がいという脳機能の違いがあると、それはとても困難なこととなります。まいすてっぷに通う子どもたちの中にも、人の表情から感情を読み取ったり、自分の気持ちを表情に表すことが難しい子どもが何人もおり、付き合い慣れた私たちであっても気持ちの読み間違いが生じます。先日一人の小学生と話していた時、話の内容は明らかに「怒ったこと」なのですが、顔はむしろ笑っています。その子に「怒りを表情に出さないの？」と聞いたら、「そんな大変なことやってられないよ」と答えました。**その子にとって、気持ちを表情に出すことは無意識にできることではなく、いちいち考えないとできないことなのです。**

一口に脳機能の「違い」といっても、目に見える違い、見えない違いがあり、ＡＳＤによる違いは外見からは判断しにくいものが多いと思われます。定型発達の人は相手の話の内容や、自分自身の気持ちに合わせて、自然と顔に表情を出すことができますが（あえて出さない時もありますが）、ＡＳＤの子どもにとってはとても難しいことであり、そのことがコミュニケーションそのものを阻害してしまいます。**親や先生が怒った顔をしていても、そのしかめた顔に何の意味があるのか、ひょっとすると読み取れていないのかもしれません。**こちらが怒っているのに、子どもが平然とした表情でいても、話を聞いていないとかふざけているなどと決めつけずに、本人の真意を探ってくれる友だちや大人の存在があるとないとでは、その後の子どもの一生は大きく変わってくるでしょう。

＜参考文献＞
京都大学ホームページ研究成果より抜粋
「自閉症児童は表情のよみとりが苦手」（平成26年12月発表）
「自閉症スペクトラム障害で目に見える表情模倣の障害（平成27年4月発表）